

# 『立正安国論』の自界叛逆難について

佐藤 祐規

日蓮は『立正安国論』の進献によつて北条氏嫡流に自界叛逆難と他国侵逼難の必然を諫告した。同書は、天台法華宗の用いた護国經典を背景に、災難対治の直道を明かにした「私の勘文」である。日蓮の説く自界叛逆難の諫告は、經文の裏付けに加え、和田・三浦氏の乱や宮騒動の先例が介在すると思われ、嫡流家の得宗専制政治の伸張に随伴する反得宗勢力の誅滅は、『立正安国論』進献以後、文永九年の二月騒動や弘安八年の霜月騒動に結実した。高木豊氏は、得宗専制政治確立の起因となつた外様御家人と得宗御内の激突を、自界叛逆難の現証として位置づけている（同『日蓮とその門弟』第四章）。本稿では、かかる内乱と日蓮遺文の記述を確認し、日蓮の自界叛逆難の諫告の静態と動態を点描したい。

## 一、和田・三浦氏の乱と寛元四年宮騒動

日蓮は文永九年の二月騒動を自界叛逆難の現証として門弟に教導し、それ以前に起きた①和田氏の乱②宮騒動③三浦氏

の乱を北条氏嫡流の政權掌握に関わる先例と認識していた。①健保元年（一二一三）五月に起きた内乱で、御家人を統括する侍所別当和田義盛一族を將軍家補佐役の執權北条義時が誅滅し、侍所別当も兼ねる執權の独裁体制をかためた。日蓮は義盛の謀反を逆説的に賞讃し、北条氏嫡流による政權掌握を認めている（定遺九七二）。②寛元四年（一二四六）六月に起きた北条氏の御内騒動で、北条時頼の執權就任直後、鎌倉幕府前將軍藤原頼經に仕えた名越光時の謀反が発覚し、光時は伊豆に流され、頼經が京都に送還された事件である。日蓮は『頼基陳状』（定遺一三五八）に親子二代に渡つて君主（名越光時、江馬四郎親時）に忠誠を誓う四条氏に対し、光時の伊豆退穩に随従した父の中務某の功績を讃え、子の頼基の名越氏近侍を首肯している（定遺一四九三）。③宝治元年（一二四七）六月に執權時頼が外戚安達泰盛の協力を得て御家人三浦泰村一族を滅ぼし、前將軍藤原頼經の側近である御家人千葉秀胤一族を自害させた事件。日蓮は「宝治の合戦すでに二十六年、

今年二月十一日又合戦あり」（定遺六一二、三）と記し、③と二月騒動を連続的に捉えている。その理由として以下のことが考えられる。日蓮がすでに執権を辞し、出家した人物に『安国論』を進献したのは、時頼が政界の中心人物であることを熟知していたからである。北条義時、泰時、時頼、時宗を国主と認める日蓮は、嫡流家の政権掌握にともなう同族・御家人による謀反の勃発を、政権擁立に伴随する必然的課題と認めていた。日蓮はかかる意味において三浦氏の乱と二月騒動を連続的に捉え、『安国論』の諫告の正統性を門弟に教導していたものと推察される。

## 二、二月騒動と自界叛逆難

日蓮の佐渡在島中に起きた二月騒動は、文永九年（一二二七）二月十一日に鎌倉で名越時章・教時が討たれ、同十五日に京都で時宗の庶兄北条時輔が誅殺された事件で、蒙古問題の処理と得宗権力の一元化のために嫡流家が反得宗勢力を一掃した粛正である。日蓮は宮騒動と連続性をもつ二月騒動について「権の大夫殿（北条義時）御子孫どううち」（定遺一一三四）と記し、自身が二月騒動の直後に情報を得て（定遺九七六）、自界叛逆難の現証として門弟に教導し（定遺一一三二）、佐渡流罪赦免の要因と感得（定遺一五六二）、『光日房御書』に「二月十一日に日本国のかためるべき大将どもよしなく打こ

ろされぬ」（定遺一二五四）、『頼基陳状』に「名越の公達横死にあはせ給へぬ」（定遺一三六〇）と名越氏が理由も無く殺害された事件と受けとめ、名越氏被官四条頼基の身辺に細心の注意を払っていたことが知られる。川添昭二氏は二月騒動で名越時章、教時を討ち取った得宗御内を斬首に持ち込んだ人物を御家人安達泰盛と推定し（同「二月騒動と日蓮—自界叛逆難—」、網野善彦氏は時宗没後に早急に將軍家權威の確立、御家人保護の諸政策を打ち出した人物を泰盛と確定している（同「関東公方御教所」について）。のちの霜月騒動は、これらの諸契機から勃発した事件と推察され、二月騒動もまた霜月騒動との連続面が考えられる。

## 三、霜月騒動とその周辺

熱原法難の折に日蓮が門弟に警告した「平（頼綱）等も城（泰盛）等も」（定遺一六七四）の一節からも推察されるように、両者の覇権争いはやがて北条時宗の死の翌年に起きた弘安八年（一二八五）霜月騒動に爆発し、得宗御内平頼綱の讒訴による執権貞時の安達一族誅滅は、時頼・時宗政権を支えた最後の有力御家人を一掃、泰盛に仕えた武蔵・上野の御家人の多数が討ち死に自害した。日蓮は檀越の大学三郎を交いして泰盛と接点を持ち、竜口法難の日蓮の斬首停止に泰盛が関わり、のちに何らかの祈りを依頼されていたことが『大学

三郎御書』(定遺一六一九)にみえる。得宗とその御内の権力が伸張するなか、日蓮の教説を受容する御家人が文永・建治・弘安年間に増加し、駿河出身の高橋兵衛入道、南条兵衛七郎・時光、石河道念は鎌倉番役など鎌倉に在住した折に日蓮に師事し、駿河(由井氏某、西山河合四郎光家)・甲斐(波木井南部長長)・伊豆(新田四郎信綱)地方の御家人は、日興の同地方教線拡張の折に自身や檀越の血縁関係を通じて改宗している(堀日亨『富士日興上人詳伝』第十二章)。こうした事態は、蒙古襲来の緊張とともに激化する外様御家人と得宗御内の軋轢が御家人層を日蓮の教説に浸透させる一因となったものと考えられる。日蓮は、文永十一年に駿河地方に住む御家人高橋氏との再会を希望しながら「するがの国は守殿の御領、ことにふじ(富士)なんどは後家尼ごぜんの内の人々多し」(定遺一〇八九)と述べ、得宗領内での幕府権力との衝突を避けるため、時頼の妻の後家尼の近親者が住む「富士賀島の辺」に近づくことを門弟に禁じている。また弘安元年五月三日の『窪尼御前御返事』は高稿氏の妻持妙尼に

守殿の御をんにすぐる人人が、守殿の御威をかりて、一切の人人をおどしなやましわづらはし候うへ、上の仰とて法華経を失て、国もやぶれ、主をも失て、返って各々が身をほろばさんあさましさよ。(定遺一五〇三)

と説示し、執権時宗の側近である得宗御内を日本国と嫡流家

を滅ぼす悪知識と難じている。同書は得宗御内を「師子の中のむし」に譬えているが、つぶさには平頼綱を指し、師子は国主時宗を意味する。頼綱は熱原法難の折、私邸で日蓮の駿河の門弟である神四郎、弥五郎、弥次郎の三名を斬首し、残りの十七名を禁獄に処し、のちに安達泰盛と対峙して霜月騒動に勝利を治めたが、同騒動以後、専制的恐怖政治を布いた頼綱は永仁元年(一二九三)四月に謀反の疑いから執権貞時に討たれ、一族九十余名とともに自害し、日興は頼綱誅滅を「法華ノ現罰ヲ蒙レリ」(宗全「二卷一六」と結んでいる。

上述の通り、日蓮が自界叛逆難とみた先例は互いに連続面をもち、和田・三浦氏の乱によって北条義時、時頼は嫡流家に拮抗する有力後家人の誅滅を達成し、宮騒動と二月騒動によつて時頼・時宗は北条一族の反得宗勢力を一掃している。このうち時頼は御家人と同族の謀反を鎮圧し、日蓮は『安国論』の進献により自界叛逆難の必然を時頼に諫告していた。得宗専制政治をめぐる得宗御内と外様後家人の拮抗は、文永九年の二月騒動を経た時宗没後の翌年に顕在化し、霜月騒動と平頼綱の乱によつてその終焉を迎え、日蓮の自界叛逆難の諫告は、嫡流家の眼前に成就していたのである。

〈キーワード〉二月騒動、霜月騒動、自界叛逆難

(立正大学大学院)